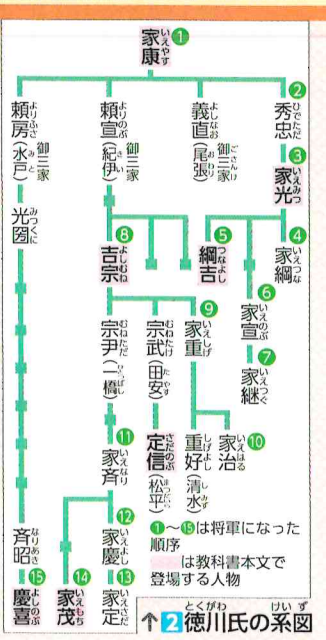
第3節 武士による全国支配の完成

3節の問い 江戸幕府はどのようにして全国を支配したのだろうか。

↑1 江戸城　1636年に完成し、江戸幕府の代々の将軍が暮らしていましたが、中央にある天守は1657年に起こった火事で焼け落ちたまま、再建されませんでした。〔『江戸図屏風』(部分) 千葉県 国立歴史民俗博物館蔵〕



↑2 徳川氏の系図

1 幕藩体制の始まり

学習課題 江戸幕府は大名や朝廷を統制するために、どのようなしくみをつくったのだろうか。

←3 徳川家康(1542〜1616)　1605年に秀忠に将軍職を譲りましたが、自身は駿府(静岡県)で引き続き力をもち続けました。〔栃木県 日光東照宮宝物館蔵〕 小 地 公

江戸時代の幕開け

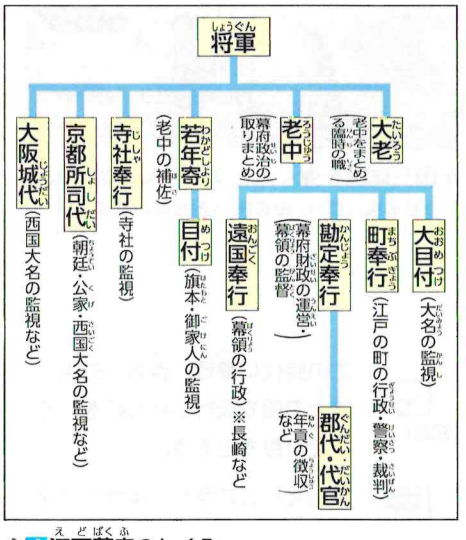
豊臣秀吉の死後、勢力を伸ばしたのは、関東を領地にしていた**徳川家康**[3]でした。1600年に家康は、豊臣氏の支配をそのまま続けようとする石田三成らの大名を、関ヶ原の戦い(岐阜県)で破り、全国支配を強めていきました。そして、1603年に朝廷から征夷大将軍に任命された家康は、江戸(東京都)に幕府を開きました(**江戸幕府**)。**江戸時代**の始まりです。家康は1615年に豊臣氏を滅ぼし(大阪の陣)、徳川氏が約260年間にわたって全国を支配する基礎をつくりました。[2]

p.117 p.54 p.154

江戸幕府のしくみ

幕府が直接支配する直轄地を**幕領**といい、将軍直属の家来の領地も含めると、江戸時代初めの石高は約400万石で、やがて全国のおよそ4分の1にあたる約700万石に及びました。また、大阪・京都・奈良・長崎などの主要都市や、全国の主な鉱山も直轄地とし、収入源としました。さらに、金・銀・銅の貨幣を発行し、貿易も独占しました。将軍は、直属の家来である旗本・御家人[解説]を中心に強大な軍事力をもっていました。幕府の政治は、将軍が任命した老中が行い、若年寄がそれを補佐し、三奉行(寺社奉行・町奉行・勘定奉行)が職務を分担して行いました。[4]

p.141 p.126



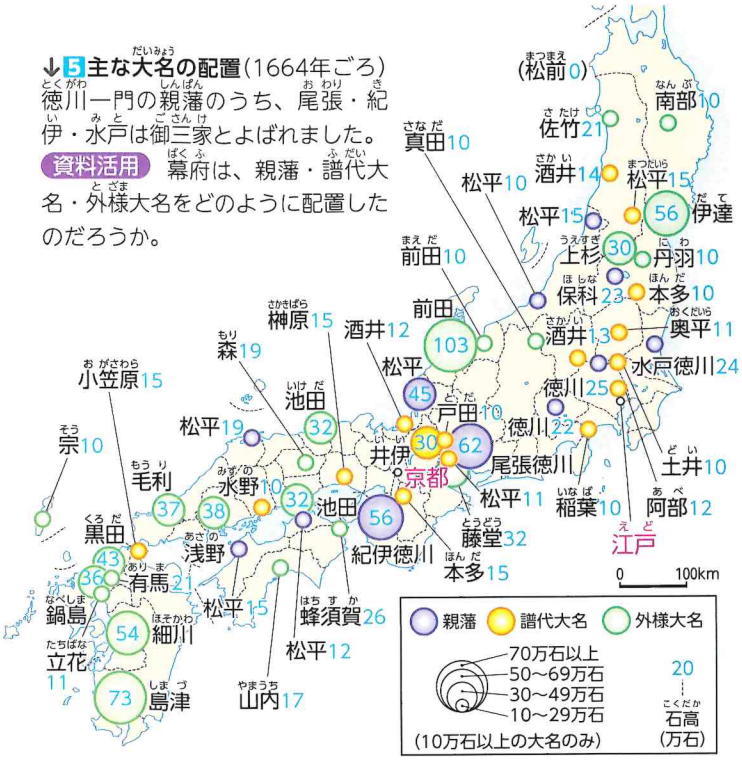
↑4 江戸幕府のしくみ

小学校・地理・公民・他教科との関連　徳川家康、江戸幕府、徳川家光、参勤交代(小)

↓5 主な大名の配置(1664年ごろ)

徳川一門の親藩のうち、尾張・紀伊・水戸は御三家とよばれました。

資料活用 幕府は、親藩・譜代大名・外様大名をどのように配置したのだろうか。

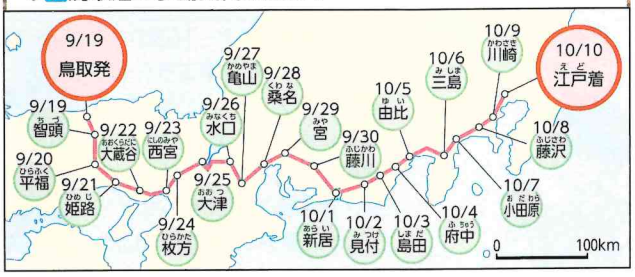


地域史 鳥取藩の参勤交代

鳥取藩主の池田氏が参勤交代を行った記録には、鳥取から180里(約702km)離れた江戸まで21泊22日を要したと記されています。出費を抑えるため、一日平均8.2里(約32km)も進みました。従者の人数は、領地の石高に応じて幕府が定めており、32万石の鳥取藩は385～550人であったとされます。

↑6 江戸から鳥取までの参勤交代にかかる費用

↓7 鳥取藩の参勤交代の道のり



幕府と藩の関係

将軍から1万石以上の領地を与えられた武士を**大名**とよび、大名は幕領以外の土地を支配しました。大名の数は時代によって変動がありますが、江戸時代後半には約270に上りました。大名には、徳川一門の親藩、初めから徳川氏の家臣であった譜代大名、関ヶ原の戦いのころから徳川氏に従った外様大名の区別があり、幕府の重要な役職には譜代大名や旗本が任命されました。大名が支配する領域は**藩**といい、藩では独自の統治が認められました。3代将軍**徳川家光**のころには、このような幕府と藩が全国の土地と人々を支配する**幕藩体制**のしくみが確立しました。

p.105

大名や朝廷の統制

幕府は**武家諸法度**を定め、築城や大名どうしの結婚などに制限を設けました。法度に違反した大名に対しては、国替や藩の取り潰し(改易)などを行いました。さらに、家光のころには**参勤交代**の制度が整えられ、多くの大名は1年おきに江戸と領地を行き来し、その妻や子は江戸の屋敷に住むよう命じられました。また、幕府は御手伝普請とよばれる、河川や江戸城を整備するなどの土木工事を大名に命じました。参勤交代や御手伝普請の費用は、大名にとって重い負担でした。また幕府は、京都所司代を置いて朝廷を監視し、禁中並公家諸法度を定めて、天皇は学問に専念することや、朝廷の役割などを示しました。

p.134

解説 旗本と御家人

徳川氏の家来のうち1万石未満で直接将軍に会うことができる者を旗本、できない者を御家人とよびます。時代で変化しますが、旗本は約5000人、御家人は約1万7000人で、その家臣を含めて約8万人になりました。

武家諸法度

一、文武弓馬の道にひたすら励むようにせよ。

一、城は、たとえ修理であっても必ず幕府に報告せよ。ましてや、新しく城を築くようなことは、固く禁止する。

一、幕府の許可がなく、勝手に婚姻を結んではいけない。 [以上元和令]Ⓐ

一、大名が自分の領地と江戸とを交代で住むように定める。毎年4月に江戸へ参勤せよ。

一、事を企て、同盟の誓約をしてはならない。

一、500石以上積める船を、つくることを禁止する。 [以上寛永令]Ⓑ

Ⓐ1615年に、家康の命令で作成され、秀忠が発布したもの

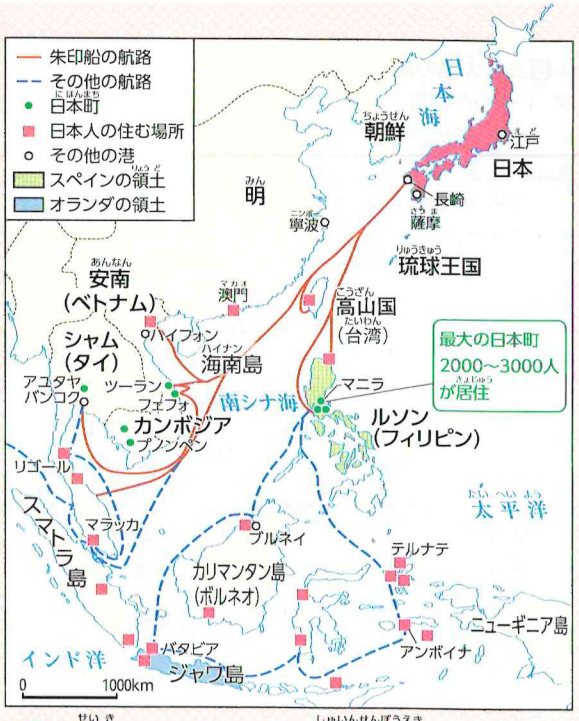
Ⓑ1635年に、家光の命令で追加され、発布したもの

確認しよう 江戸幕府が大名や朝廷を統制するために行った政策を、本文から三つ書き出そう。

説明しよう 幕藩体制とはどのような体制か、説明しよう。

↑1アユタヤの日本町を再現した想像復元CG

→2山田長政(？～1630)
山田長政は1612年ごろシャム(タイ)のアユタヤにあった日本町に渡りました。やがて日本町の長となった長政は、外交・軍事面で活躍するなどしてシャム国王の信頼を得ました。



↑3 17世紀初めの東南アジアと朱印船貿易

2 朱印船貿易から貿易統制へ

3節の問い 江戸幕府はどのようにして全国を支配したのだろうか。

学習課題 幕府は、盛んになっていた貿易やキリスト教の布教に、どのように対処していったのだろうか。

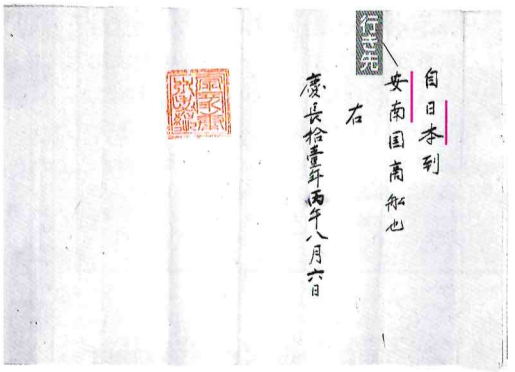
東南アジアと朱印船貿易

徳川家康(p.124)は、朝鮮と交流のあった対馬(長崎県)の宗氏(p.87)に交渉を命じて、豊臣秀吉(p.117)の出兵以降、関係が壊れていた朝鮮との国交を回復しました。明(p.129)とも国交を回復しようとしましたが、正式な貿易(p.86)はできませんでした。他方、東南アジアとの貿易は、秀吉のころに引き続いて盛んに行われました。

家康は、国交の回復だけでなく、貿易の統制(p.119)も目指しました。そこで、外国と貿易する大名や豪商に、海外への渡航を許すという証書(朱印状[4])を与えて、収入の一部を幕府へ納めさせました(**朱印船貿易**[3])。また、東南アジアの国々に対しても、朱印状をもつ船(朱印船)の安全を保証するよう求めました。17世紀に入るとヨーロッパで台頭してきたオランダ(p.111)やイギリス(p.166)からの貿易の求めにも応じました。これらの貿易を通じて、幕府は正式な貿易ができない明の生糸・絹織物なども輸入し、日本からは主に銀を輸出しました。❶

朱印船貿易の結果、多くの日本人が東南アジア各地に渡り[2]、ルソン(フィリピン)・安南(ベトナム)・シャム(タイ)などの主な港や都市には**日本町**[1]ができました。また、国内でも唐人町(p.113)とよばれる外国人居住区が、戦国時代から西日本の各地に成立していました。

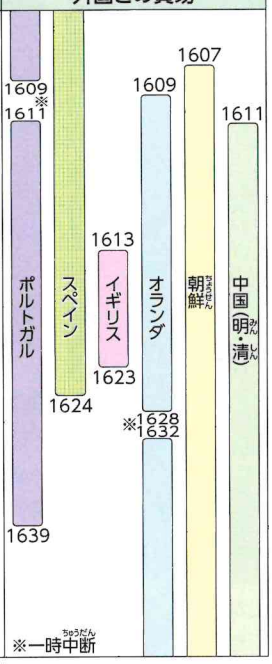
❶ 当時の日本では、大量の生糸をつくることはできず、生糸は輸入に頼っていました(→p.147)。その一方でこの時期、銀が大量に産出し(→p.113)、輸出する品目の約90%を占めました。



↑4朱印状　朱印状には行き先が示され、徳川家康が許可したことを意味する朱印が押されています。[(公財)前田育徳会蔵]

資料活用 朱印状が示す目的地を、図3から探してみよう。

年	出来事
1601	朱印船貿易開始
1607	朝鮮と国交を回復
1609	幕府がオランダとの貿易を許可
1611	明の商人に長崎での貿易を許可
1612	幕領でキリスト教を禁止 このころ山田長政がシャムに渡る
1613	幕府がイギリスとの貿易を許可 全国でキリスト教を禁止
1616	中国船以外の外国船の入港地を平戸・長崎に限定
1623	イギリスが平戸の商館を閉鎖
1624	スペイン船の来航を禁止
1635	日本人の帰国・海外渡航を禁止
1637	島原・天草一揆(～38)
1639	ポルトガル船の来航を禁止
1640	宗門改めの強化
1641	平戸のオランダ商館を出島に移す このころからオランダ人に風説書を提出させる



↑5キリスト教の禁止と貿易統制までの流れ

天草四郎　1623？～38

一揆軍の象徴となった少年

17世紀前半は世界的に寒冷な時期で、日本でも作物が育たなくなるなかで島原・天草一揆は起きました。一揆のとき、原城跡(長崎県)に立てこもった百姓ら約3万7000人の大将に担ぎ出されたのは、当時15歳の天草四郎(益田時貞)でした。実際は、大将というよりも、一揆軍の象徴や心のよりどころになっていたようです。

→6島原・天草一揆　一揆軍は、海に突き出た丘の上に築かれた原城跡に立てこもったため、幕府軍は攻撃に苦戦しました。本来は非戦闘員である女性や子どもも、石垣の高さを利用し、一揆軍として石や熱湯を用いて戦いました。〔『島原陣図屏風・戦闘図』福岡県朝倉市 秋月博物館蔵〕小 地 公

キリスト教の禁止と貿易統制

家康は初め、キリスト教の日本への影響よりも、貿易の利益を優先していました。しかし、神への信仰を重んじるキリスト教が幕府の支配の妨げになり、スペインやポルトガルによる侵略のきっかけにもなると考え、1612年に幕領で、次いで翌13年に全国でキリスト教を禁止し(禁教)、宣教師を国外へ追放したり、キリシタンを迫害したりしました。

p.119
p.110、112
p.124

さらに幕府は禁教を徹底し、貿易港を制限しました。5 それでもキリシタンは減らず、幕府は、スペイン船の来航禁止や、キリシタンの捜索を行い、7 日本人の海外渡航と海外からの帰国を禁じました。この結果、朱印船貿易も停止されました。

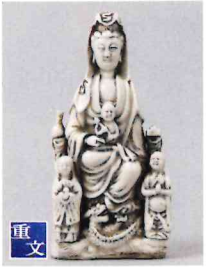
↑7絵踏の様子　幕府は、キリシタンが信仰の対象としてあがめている十字架やイエス・聖母マリアの絵を人々に踏ませる絵踏を行い、信者であるかないかを判断しました。〔オランダ ライデン国立民族学博物館蔵〕

島原・天草一揆と宗門改め

禁教が進むなか、キリシタンが多かった島原(長崎県)と天草(熊本県)で、重い年貢の取り立てとキリシタンへの厳しい弾圧に抵抗して、1637年に人々が一揆を起こしました(**島原・天草一揆**)。6 人物 徳川家光は大軍を送ってようやくしずめ、1639年にはポルトガル船の来航も禁止しました。5

p.125

この一揆のあと、領民が仏教徒であることを寺院に証明させる宗門改めが強化されました。禁教を目的として帳簿がつくられましたが、やがてキリシタンが見つからなくなると、8 結婚・出生・死亡や移転などを記した戸籍としても用いられました。



→8マリア観音像　弾圧を受けたキリシタンは、観音像をマリア像に見立てるなど、ひそかに信仰を続けました。〔東京国立博物館蔵〕

確認しよう　江戸時代初めに幕府が行った禁教政策を本文から書き出そう。

説明しよう　幕府がキリスト教を禁止し、貿易を統制していった理由を説明しよう。

縄文 弥生 古墳 飛鳥 奈良 平安 鎌倉 南北朝 室町 戦国 安土桃山 江戸 明治 大正 昭和 平成 令和

↑1出島　外国船は季節風を利用して夏に来航しました。出島や清船荷物蔵は島になっているため、丘の上の長崎奉行屋敷から、人や輸出入品の出入りを厳しく監視できました。〔川原慶賀作『長崎港図』兵庫県 神戸市立博物館蔵〕 小 地 公

↑2出島にあったオランダ人の住む家の内部　オランダ人は出島で過ごすきまりになっていました。〔『漢洋長崎居留図巻』(蘭館図)長崎歴史文化博物館蔵〕

長崎の港に来ているアとイの船は、どこの国だろう。

3 四つに絞られた貿易の窓口

3節の問い　江戸幕府はどのようにして全国を支配したのだろうか。

学習課題　幕府は、貿易についてどこを窓口とし、どのように関わっていったのだろうか。

「鎖国」と四つの窓口

幕府が貿易を統制し、日本人の出入国を禁止した政策は、江戸時代後半に「**鎖国**」ともよばれるようになりました。しかし、その言葉が示すように国が完全に鎖されたわけではなく、四つの窓口が開かれていました。その四つとは長崎・対馬(長崎県)・薩摩(鹿児島県)・松前(北海道)で、長崎とそれ以外の窓口では幕府の対応が異なりました。幕領の長崎では、幕府が貿易の統制を行い、対馬・薩摩・松前では、それぞれの領地を治める藩が幕府の認可の下で外交や貿易を行いました。

p.127 p.124 p.130 p.131 p.124

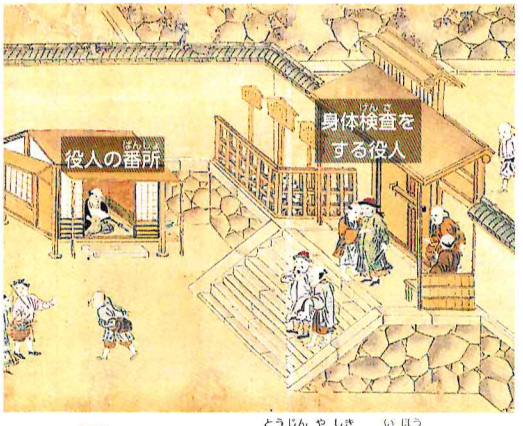
オランダと清への窓口

長崎では、貿易は長崎奉行の監督の下で行われ、幕府によって銀・銅・海産物などが輸出され、上質な中国産の生糸・絹織物・砂糖・薬種などが輸入されました。

p.142

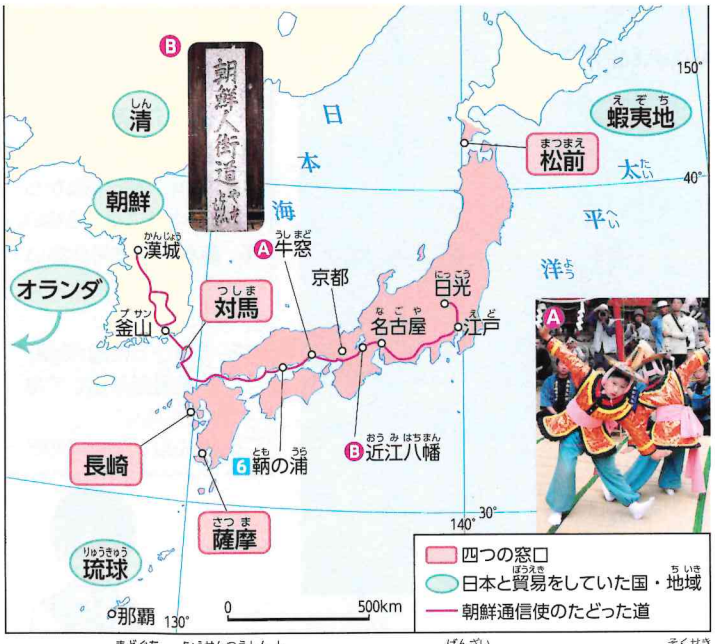
東南アジアでオランダとの貿易競争に敗れたイギリスは、貿易の中心をインドに移し、平戸(長崎県)の商館を閉鎖していました。その後スペインとポルトガルは来航を禁止され、日本と貿易をするヨーロッパの国は、キリスト教を布教しないオランダだけとなりました。また、幕府はキリスト教の影響を考え、洋書の輸入を制限し、1641年に平戸のオランダ商館を長崎の**出島**に移しました。さらに、

p.126 p.127



↑3長崎に置かれた唐人屋敷　違法な取り引きを防ぐため、門には役人が控えていました。〔『長崎唐蘭館図巻』(唐館図)兵庫県 神戸市立博物館蔵〕

小学校・地理・公民・他教科との関連　鎖国、対馬、薩摩、出島、朝鮮通信使(小)



↑4 **四つの窓口と朝鮮通信使のたどった道**　現在でも朝鮮通信使の足跡が各地に残っています。「朝鮮通信使に関する記録」は2017年に、ユネスコの「世界の記憶」に登録されました。Ⓐ唐子踊（岡山県）〔岡山県 瀬戸内市提供〕、Ⓑ朝鮮人街道の碑（滋賀県）地図帳活用

未来に向けて　日本と朝鮮をつないだ倭館　人権・多文化

国交回復後、釜山に倭館が設けられました。1678年に完成した草梁倭館は33万㎡の広さで、日本風の暮らしができました。対馬から派遣された日本人の男性が常に500人ほどおり、朝鮮の人々との交流は制限されましたが、近隣を散歩することは可能でした。対馬藩では、朝鮮との対等な外交を説いた雨森芳洲など、朝鮮を理解するために言語を深く学ぶ人も現れました。

→5 **釜山の日本人居住区**

←6 **朝鮮通信使が宿泊した施設**　幕府は、宿泊など、使節のもてなしを各藩に命じました。〔広島県 福山市 鞆の浦 福禅寺 対潮楼〕

オランダに対して、海外の情報を集めたオランダ風説書などを提出させ、その情報を独占しようとしました。

中国では、漢民族が政治の中心であった明に代わって、17世紀前半に中国東北部の女真族による**清**が成立し、モンゴルやチベットなども含む広大な地域を支配しました。日本と清の正式な国交は結ばれないままでしたが、清の商人は長崎に来航して貿易を行いました。また、長崎には中国人が滞在する唐人屋敷も置かれました。長崎での貿易を許可されたのは、オランダ・中国の2か国のみでした。

朝鮮への窓口

対馬では、国交の回復を仲介した宗氏が朝鮮との貿易を担当し、朝鮮の釜山には貿易などを行う倭館が置かれました。対馬では、銀・銅が輸出され、朝鮮特産の朝鮮人参や生糸・絹織物・木綿が輸入されました。

朝鮮からは、主に将軍が代わるごとに就任祝いの外交使節が日本を訪れました。この使節は**朝鮮通信使**とよばれました。400～500名の大規模な使節団が音楽隊の演奏を伴いながら江戸へ向かう様子は、当時の人々に外国人の姿を印象づけ、彼らをまねた踊りも行われるようになりました。使節団のなかには優れた学者や医者もおり、滞在中には日本の学者や文人との交流が行われました。

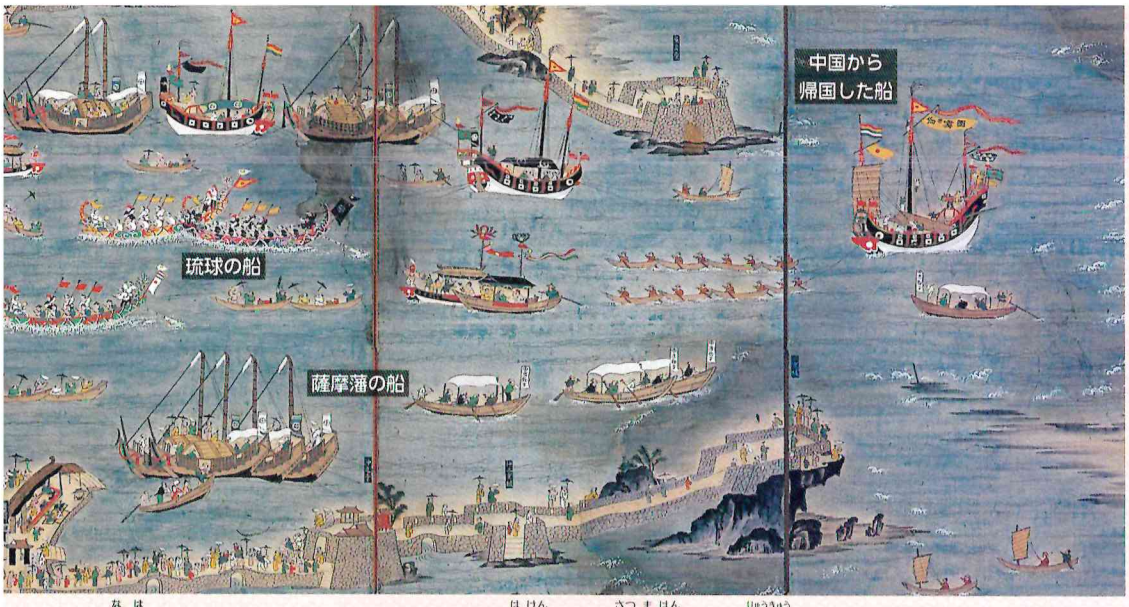
解説　オランダ風説書

オランダ船が毎年、幕府にもたらした海外の情報です。オランダ商館長から提供された情報は翻訳され、幕府へ届けられました。風説書は、外国の戦争や国王の交代など、海外の動きを知る貴重な情報源でした。

↑7 **朝鮮通信使の音楽隊**〔長崎県対馬歴史研究センター蔵〕

確認しよう　四つの窓口と、その主な貿易相手を、それぞれ本文から書き出そう。

説明しよう　幕府が世界とつながる窓口を限定した理由を説明しよう。



↑1**那覇港のにぎわい**　那覇港は、中国への派遣船や、薩摩藩の船、琉球の船でにぎわっていました。この屏風はその様子をまとめて描いたものと考えられています。〔『琉球貿易図屏風』滋賀大学経済学部附属史料館蔵〕

薩摩藩が琉球に出した決まり

1. 薩摩藩が許可した以外の品物を中国から買ってきてはならない。
6. 薩摩藩の許可がない商人を受け入れてはならない。
13. 琉球から他国（他藩）へ貿易船を出してはならない。

〔『掟十五条』より、一部要約〕

4 琉球王国とアイヌ民族への支配

3節の問い　江戸幕府はどのようにして全国を支配したのだろうか。

学習課題　琉球王国とアイヌ民族は、薩摩藩や松前藩とどのような関係にあったのだろうか。

琉球への窓口

徳川家康は、朝鮮出兵で断絶した明（p.86）との関係を改善するため、琉球王国（1 p.88）（沖縄県）に明との仲介役を期待しました。薩摩藩（鹿児島県）が交渉にあたりましたが、琉球が仲介を断ったことを理由に1609年に出兵し、薩摩藩は琉球王国を支配しました。そして、検地を行って百姓から年貢米や布を取り立てるなど、厳しく監督しました。

従来より琉球は、明に朝貢（史料 p.21）し、明の文化や産物、海外情報を積極的に取り入れていました。それらは幕府（p.132）や薩摩藩にとっても貴重だったため、幕府や薩摩藩の管理の下で、明や清（p.129）への朝貢を続けることが認められました。琉球から中国へは、薩摩藩を通して入手した、蝦夷地（北海道）や日本各地の昆布（p.142）・ふかひれ・なまこなどの海産物が輸出（p.143）され、中国から琉球へは、絹織物・医薬品・茶・陶磁器が輸入されました。また、琉球では特産の黒砂糖（p.143）や漢方薬・染料に使われるウコンが盛んにつくられ、琉球はそれらを薩摩藩の商人を通じて大阪で売り、その利益を中国との貿易資金にしました。

琉球からは、将軍が代わるごとに慶賀使とよばれる就任祝いの使節と、琉球王が代わるごとに謝恩使（2）とよばれる感謝を示す使節が江戸に派遣されました。薩摩藩は、琉球の使節が着る中国風の衣装を

↑2**琉球からの謝恩使**　琉球からの使節は、慶賀使と合わせると、江戸時代を通して計18回派遣されました。使節は約100名からなり、江戸までの往復の費用は琉球にとって重い負担でした。しかし、使節の派遣によって王国としての地位を保てたので、琉球王国にとって重要な外交儀礼でした。〔『琉球中山王両使者登城行列』国立公文書館蔵〕

↑3 松前港のにぎわい　本州から来港する商人は松前藩の許可がないと交易ができないため、多くの交易船が松前港に集まりました。〔大阪歴史博物館蔵〕

↑5 アイヌオムシャの様子　オムシャとはアイヌ語で「あいさつ」ともいわれ、もともとアイヌ民族との交易の場を指していました。松前藩ができてからは、藩の役人がアイヌ民族を集め、支配するための儀礼となりました。〔『日高アイヌオムシャ之図』北海道 函館市中央図書館蔵〕

←4 松前藩とアイヌ民族の取り引き〔北海道博物館蔵〕

より強調して行進させ、幕府と薩摩藩の権威が遠く琉球まで及んでいることを国内の人々に印象づけました。

蝦夷地への窓口

蝦夷地の多くの土地にはアイヌ民族が暮らし、南西部の渡島半島には松前藩の和人の住む和人地があ[解説 p.89][p.89][6]りました。アイヌ民族は、漁や狩りを行ってにしん・鮭などの海産物や毛皮などを渡島半島や東北地方まで運び、和人と、米・木綿・鉄製品などと交換していました。また、彼らは千島列島・樺太・中国東北部の人々とも交易していました。[p.133]

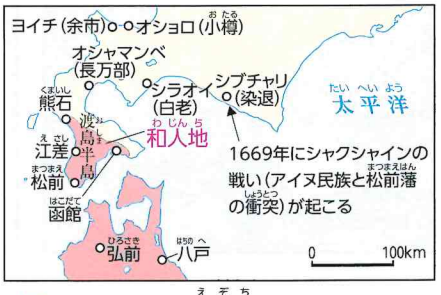
松前藩は、耕地が乏しく冷涼な気候で米がとれなかったことから、年貢米による収入の代わりにアイヌ民族と交易し、その利益を独占する権利を幕府から与えられました。[5][3]

交易をめぐる衝突

松前藩の武士は、アイヌ民族の住む地へ行き交易を行っていました。しかし、品物を交換する際の比率がアイヌ民族にとって不利なものになると、松前藩への不満が高まりました。[4]アイヌ民族は、貿易のあり方をめぐって松前藩と対立し、1669年に**シャクシャイン**を中心に立ち上がって戦いました。しかし、幕府の支援を受けた松前藩に敗れ、その結果、松前藩が交易の主導権を握るようになりました。18世紀になると松前藩の武士は、海産物の交易を大商人に請け負わせ、後には多くのアイヌ民族が漁場に働き手として駆り出されることになりました。

解説　蝦夷地

蝦夷は、古代に日本の東北部に住んでいた人々(→p.54)のことで、和人がつくった言葉です。蝦夷とアイヌ民族の関係は明らかになっていませんが、この蝦夷に由来して、北海道は和人から蝦夷地とよばれていました。



↑6 1669年ごろの蝦夷地

確認しよう　琉球王国と薩摩藩、アイヌ民族と松前藩の交易品を、本文からそれぞれ書き出そう。

説明しよう　琉球王国と薩摩藩、アイヌ民族と松前藩が、それぞれどのような関係にあったか説明しよう。

節の問いをまとめよう ➡ p.158

歴史を探ろう

琉球とアイヌ民族の暮らし

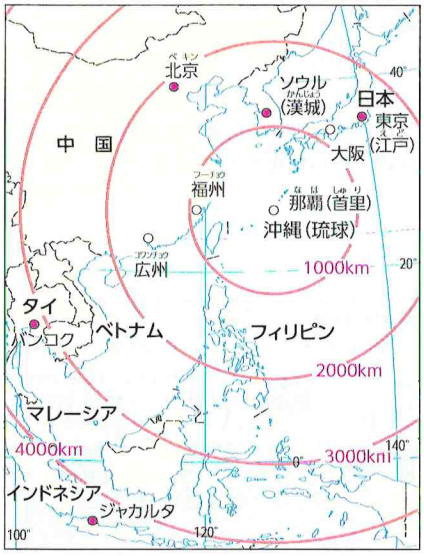
～大陸との交流と独自の生活・文化～

QR 他分野リンク

1 琉球の人々の暮らし

←1 琉球の様子　明治時代に描かれた琉球の人々で、芭蕉布でできた服を着ています。頭に荷物を乗せる女性や、日傘を差している士族の男性の姿もみえます。［『沖縄風俗図会』阪巻・宝玲文庫 アメリカ ハワイ大学蔵］

→2 ノロ（女性の神職）　世襲制で代々受け継がれ、収穫祭などの、地域の祭礼を取りしきりました。［東京国立博物館蔵］



←3 琉球から近隣諸国への距離

→4 三本の弦の楽器
A三弦［東京都 民音音楽博物館蔵］、B三線、C三味線［静岡県 浜松市楽器博物館蔵］

琉歌

“恩納岳あがた
里が生まり島
森ん押し除きてい
くがたなさな”

私の愛する人（里）は
恩納岳の向こう側
人を隔てる邪魔な
ムイ（森・山）など
押しのけて
彼の住むシマ（村）もろとも
こちらへ引き寄せよう

［恩納ナビの歌 18世紀前半］

↑5 組踊　琉球の人々は、江戸で学んだ能楽や歌舞伎の影響を受けながらも、琉球の古い言葉を用いたり、三線の音楽を取り入れたりすることで、琉球独自の歌舞劇をつくり上げました。2010年、ユネスコの無形文化遺産に登録されました。［（公財）国立劇場おきなわ運営財団提供］

1 琉球の人々はどのような生活をしていたのかな？

琉球の人々は、南国の風土に適した風通しの良い芭蕉布でできた衣服を着ていました。芭蕉布は芭蕉とよばれる植物の繊維からできており、王族から農民に至るまで愛用されました。成人男性はカタカシラというマゲを結い、冠の色や かんざし の種類で身分を区別しました。女性は、帯をしめないゆったりとした服を着こなし、成人女性は手にハジチという入れ墨をしていました。また、公的な祭礼を担うために、ノロとよばれる女性神官が各地に配置され、琉球の支配を宗教面から支えました。

琉球の士族は武芸ではなく、音楽や芸能、詩文などの文化的な素養が求められました。また、琉球は海外との交流でさまざまな文化を取り入れていきました。三線とよばれる楽器は、中国の三弦が琉球風に変化したものです。日本の能や狂言などを参考に、組踊という歌舞劇も生み出しました。こうした音楽や芸能は単なる娯楽を目的としたのではなく、外交の場でも披露されました。このほか、琉歌とよばれる8・8・8・6の30音で表す独自の歌もありました。

疑問

江戸時代、貿易の窓口として、南には琉球への窓口が、北には蝦夷地への窓口が開いていたんだ。そのころの琉球とアイヌ民族の生活や文化は、どのようなものだったのかな。

主な関連事項と関連ページ

琉球への窓口　p.88、130
蝦夷地への窓口　p.89、131
北海道の地名の由来　p.197

2 アイヌ民族の暮らし

↑**6 イオマンテ**(熊の霊送り)**の様子**　アイヌ民族は食料になる動物を、姿が変わった神(カムイ)であると考えていました。そのため、動物の肉や毛皮を受けとる際は、その霊魂に礼を尽くし、神々の国に送るための儀式をとり行いました。カムイのなかでも、熊は「キムンカムイ(山の神)」とよばれる、位の高い神であるとされ、最大の敬意をもって扱われました。
[『アイヌ熊送之図』北海道 函館市中央図書館蔵]

←**7 蝦夷錦**
高級な絹織物でできていました。
[北海道市立函館博物館蔵]

↑**8 蝦夷錦が伝わった道**　中国や琉球では、龍は国王など高貴な人の象徴でした。

→**9 アイヌ民族が狩りを行う様子**
アイヌ民族の狩猟では弓矢が使われました。また獲物を追い込むため、犬を連れていました。[『蝦夷人鹿狩之図』北海道(公財)アイヌ民族文化財団蔵]

ふくろうの神のみずから歌った謡
～銀の滴降る降るまわりに～

「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに。」という歌を歌いながら子供等の上を通りますと、(子供等は)私の下を走りながらいうことには、「美しい鳥！神様の鳥！さあ、矢を射てあの鳥、神様の鳥を射当てたものは、一ばんさきに取った者はほんとうの勇者、ほんとうの強者だぞ」

"Shirokanipe ranran pishkan, konkanipe ranran pishkan."…
[　銀の滴　降る降る　まわりに　金の滴　降る降る　まわりに　]

[知里幸恵(→p.245)『アイヌ神謡集』(1923年)より、抜粋]

2 アイヌ民族はどのような生活をしていたのかな？

アイヌ民族は、自然・動物・植物など生活に関係するすべてのものに神が存在すると考え、それらに感謝して、必要な量だけを狩猟・漁労・採集でとる生活をしていました。アイヌ民族の衣服は、動物・魚・木などの皮からつくられ、アイヌ文様がつけられました。家はチセとよばれ、材料はその土地で手に入るものでした。集落はコタンとよばれ、交通に便利な川や海に近く、災害に遭いにくい場所につくられました。アイヌの言葉のなかには、ポロ(大きい)やナイ(川)など現在の北海道や東北地方の地名に残るものや、トナカイやラッコなど現在の日本語に残るものもあります。アイヌの言葉で神々や人間に関する物語も語られ、英雄を主人公としたものはユカラ(ユカラ)とよばれました。

また、松前藩を通じて江戸や上方にもたらされたことから「蝦夷錦」とよばれた衣服は、実は中国の役人の制服で、アイヌ民族が交易で入手したものでした。このように、琉球やアイヌ民族は、中国など周辺の国や地域とも結びついて独自の文化を築き、日本の文化にも影響を与えました。